

視点

『逆説』的考察二題

財務省関東財務局長 村上 和也



コンサート・ホールの響き

筆者はクラシック音楽やオペラの鑑賞を趣味としている。前任のロンドン勤務（欧州復興開発銀行理事）の間も、演劇の本場ならではの優れた演出によるオペラ公演を楽しんだ。ところが、交響曲などのオーケストラ・コンサートには不満が残った。ロンドンに本拠を置くオーケストラは水準が高い。ウィーン・フィルなどの外国オーケストラも頻繁に客演するのに、である。ロンドンのコンサート・ホールでの音の響きが悪いのである。

専門書によれば、コンサート・ホールでの理想的な残響時間は2秒以上であり、オペラ・ハウスの場合は歌詞が聞き取れるように少し短い1.5秒の残響が理想とされている。ロンドンの主要なコンサート・ホールは様々な理由で、残響が十分でないのである。

前置きが長くなってしまったが、コンサート・ホールの響きの良し悪しが簡単にわかる方法があるのをご存知ですか。答えは、「音響の改良のために繰り返し改修工事を行っているホールは音響の悪いホールである。」ロンドンのロイヤル・フェスティバル・ホールやバービカン・ホールなどはこれに当てはまる。もちろん改修工事の目的は音響の改善であるが、音の響きはホールの形状によって太宗が決まり、事後的な改修工事の内装をいじることによって劇的に改善することが難しいからである。

株主と経営者との関係

最近、欧米で企業経営者の報酬が高すぎるとの批判が大きくなっている。筆者もロンドン勤務時代にどうしてシティの金融機関など

の経営者の報酬が高いのか疑問を抱いた。

まず、一生かけても使えそうにない高額報酬を、経営者たちはどのように使っているか。筆者が知り得た限りでは、別荘やヨット(!)は一通り持っているとのことだが、一般的につつましい生活をしている人も多い。普段の昼食は職場の近くの店で売っているサンドイッチで済ますなど。有り余ったお金は、英国の場合チャリティー（慈善事業）に寄付することが多いとの由である。したがって、個人の欲望だけでは説明できない。

そこで、ある英国のエコノミストは次のように説明している。会社の株主にとって、株主の利益を最大限にもたらしてくれる経営者を選ぶ必要があるが、株主は会社の日々の経営にタッチしていないので、経営者（またはその候補者）の資質・能力の判断ができない。したがって、報酬を高くすることで優れた経営者が来てくれる環境作りをすることしかできない、というのである。

高額報酬を約束された欧米企業の経営者は、株主の利益の最大化を掲げ、内部留保を圧縮し、手元の現金・流動性を配当に回した。事業は全て借入金で行い、レバレッジを上げることで収益を高めた。こうしたビジネス・モデルは金融緩和局面では成功したが、昨年秋以降に顕著となった金融収縮局面においては、すぐに資金繰りが窮屈になり弱点をさらすこととなった。欧米金融機関は、高い利益を挙げするために大きなリスクをとったことで、巨額の損失に苦しんでいる。一般的に内部留保を重視する経営をしてきた日本企業の方が、現在の厳しい環境下で相対的に有利な立場にある。